

## スーパー戦隊 放送50年

特撮ドラマ「スーパー戦隊シリーズ」の第1作放送から今年で50年。幅広い世代の視聴者を引きつけ、テレビ文化の一翼を担ってきた。なぜ半世紀もの長きにわたり愛され続けたのか。また、変化する社会や時代がどう作品に映し出されてきたのか。出演した俳優とテレビに詳しい識者、ジェンダー論の研究者に聞いた。

スーパー戦隊シリーズはテレビ朝日系で放送。1975年開始の第1作「秘密戦隊ゴレンジャー」以来、登場人物が赤や青、黄などの戦士に変身し、敵と戦う姿が「基本」の設定だ。放送中の「ナンバーワン戦隊ゴジュウジャー」は49作目になる。テレ朝は来年、同シリーズの放送枠で新作特撮ドラマ「超宇宙刑事ギャバン インフィニティ」を始めると発表。50年続いたシリーズは一区切りとなる。

49作目で一区切り

若松 孝司

愛知淑徳大教授

わかまつ・たかし

1968年生まれ。愛知県出身。名古屋大大学院博士前期課程修了。2011年から愛知淑徳大交流文化学部教授。専門は国際政治学とジェンダー論。

—写真は同大提供



スーパー戦隊シリーズは当初から未就学の、特に男の子がメインターゲットでした。先行していた「仮面ライダー」や「ウルトラマン」の各シリーズとの違いは、「戦うグループ」ということだった。チームを描く場合、それぞれに役割を持たせることになりますが、1作目の「秘密戦隊ゴレンジャー」では、女性の戦士が優しく、ほかのメンバーを包み込むような性格のキャラクターとして描かれていました。任務は武器開発や爆発物処理などでしたが、スーツの色はピンクでした。

今なら問題視すべき、いわゆる「女性らしい」描かれ方と言えますが、当時としては違和感なく受け入れられたのでした。戦隊シリーズは言わば時代の鏡のようなもので、その時々の社会に受け入れられるよう、世の中のトレンドや考え方の変化を懸念に取り入れてきた。女性戦士の描き方も、時代に合わせて変化してきました。1984年開始の「超電子バイオマン」では、女性戦士が2人になり、一人はピンクのスーツで、もう一人は黄色で負けず嫌いなキャラクターとして描かれました。85年に男女雇用機会均等法が成立し、社会の中での女性の役割にも変化がありました。ピンクと

戦隊も「ピンクは女の子の色」というステレオタイプから脱却し、放送中の「ナンバーワン戦隊ゴジュウジャー」では、女性戦士の色として初めて「ブラック」を使用しています。色だけでなく性格もパーソナライズしていない登場人物が多い「ゴレンジャー」から半世紀を経た最近の作品は、女の子の視聴者も意識し、固定化されない女性の役割を示していくと言えます。

社会の変化を映すという意味では、近年の作品は敵を敵としないケースも多々あります。以前は「地球を征服にきた敵」に立ち向かう勤勉懲悪が主流でしたが、今は途中で敵が味方になるなど、悪の描き方にも変化が見られます。何が良い、悪いは一概には言えないという考え方方が広がってきたことが、作品にも反映されたと言えるのではないかと思います。

未就学の子供たちにとって、戦隊シリーズは、外の世界に出る前にチーマークや対人関係を習い覚える際のモデルとなる「よくできた保育園」だったのではないかとおもいます。

黄色にはそれぞれ、女性が求められる家庭と職場での役割が反映されているのではないか。2000年代になると、性別役割分業についての問題意識が、社会の中で高まるようになりました。戦隊も「ピンクは女の子の色」というステレオタイプから脱却し、水色と白色の女性戦士のシリーズや、「暴太郎戦隊トンボラザーズ」(22~23年)では男性戦士にピンクを使うなど変化してきました。

—聞き手・小林杏花

## 社会変化に対応続けた「定番」

2025年12月3日（水）毎日新聞朝刊 9面より

この記事は毎日新聞社の承諾を得て掲載しています。